

「家族」とは何か

栃木県・さくら市立喜連川中学校 3年
大田 葵 (おおた あおい)

みなさんは、「本当の『平和』とは？」と質問されたら、何と答えますか。「戦争や紛争などがないこと」ですか？それとも「自分自身の幸せのこと」ですか？一人ひとりの抱く「平和」のイメージは違うことでしょう。

僕の思う本当の「平和」。それは、「家族」がいて「家庭」があることだと思います。なぜそう思うかという、今僕は訳あって家族とは離ればなれに暮らしているからです。一歳前後には既に家族とは離れ、施設にいました。母親や姉、兄の存在はわかっていますが、一緒に過ごした時間は限られたもので、今でもほとんど交流はありません。そのせいか、僕はいつも「家族」や「家庭」というものに強い憧れを抱いています。

自分がまだ幼い頃は、自分と同じくらいの子が母親と手をつないでいる姿がとてもうらやましく、「どうして自分には母親がいないんだろう。」と思っていました。仕舞いには、自らの母親を恨んでしまったのです。小学生になっても、その気持ちは変わらず、母親への恨みは増すばかりでした。

しかし、小学五年生の夏、思いもよらぬ出来事が起きました。それは、引越しがあったことです。そこで僕は、新しい土地、そして新しい里親という人たちに出会いました。里親の人たちと暮らした数年間、僕は幸せでした。そこで僕は、僕の周りにはいつも支えてくれる人たちがいることに気づきました。血のつながりがなくても、僕に自分の子どものように接し、育ててくれた里親の人たち、養護施設の先生方など、たくさんの方たちに僕は見守られて成長してきたことに気づいたのです。僕を支えてくれる人すべてに、感謝の気持ちがわき出てきました。それ以来、僕は親という存在にこだわらなくなりました。それどころか、自分に命を与えてくれた親に感謝の思いを抱くようになったのです。

この夏、母親の育児放棄が原因で二人の乳幼児が衰弱死するという、悲しい事件がありました。二人の子どもにろくに食事も与えず、風呂も入れなかったそうです。さらに、逮捕後その母親は、

「家に帰ってあげなかったことを今も後悔している。子どもは私を恨んでいると思う。」

という言っではならない発言をしました。僕は怒る前に、亡くなった二人の子どもたちがかわいそうでなりませんでした。

と同時に、僕はこの母親はどうしてこのようなことをしてしまったのだろう、とすごく考えさせられました。僕は、本来親は子どもを殺すのではなく、守るためにいるのだと考えます。たとえ小さな子どもでも、立派な一人の人間です。その命を守り育てていくことが、親として大切な役目だと思うのです。この母親は、どこで勘違いしたかは知りませんが、親としての自分の責任を理解していなかったのではないのでしょうか。

そして、その勘違いを誰も母親に気づかせてあげられなかった事実。母親と一緒に遊び歩いていた友人はもちろん、母親の家族が少しでも助けることができたら、母親の行動を戒めることができたら、連絡を受けた児童相談所がもう少し踏み込んだ行動が取れていたら、このような悲しい結末にはならずに済んだのではないのでしょうか。やりきれない思いばかりがこみあげてきます。

もう一つ、この母親は大きな勘違いをしています。それは、「子どもは私を恨んでいると思う。」という言葉です。僕は、この子どもたちが母親を恨んでいるとは思えません。子どもたちは、母親が帰宅するといつもハイタッチをして喜んで迎えたそうです。子どもたちは、母親のことが大好きだったのでしょう。たとえ自分たちを見放した母親でも、恨んでいるとは決して思えないのです。

子どもは、心の底から自分の母親のことを恨めないと思います。この世に生を受け笑ったり怒ったり泣いたり、毎日いろいろな経験ができるのは、自分を生んでくれた母親という存在があったからです。正直、僕も小さい頃は母を恨んだことがありました。愛情の裏返しというように、母親への思いが憎しみに変化してしまっただけです。でも、心の底には母への恨みとは全く正反対の気持ちが存在し続けていました。だからこそ、この子どもたちがどんな思いで死んでいったのかわかるような気がします。母親を信じ、ひたすら母親の帰りをまちわびていた思いが。

僕にとっての「家族」。それは同じ屋根の下で暮らす人々のことです。たとえ血はつながってなくても、僕を支え励ましてくれる人たち、そのすべての人が僕にとっての大切な「家族」なのです。今僕の暮らす養護施設には、いろいろな事情を抱えた二歳位から高校生までの子どもたちや職員の方が約六十人います。今の僕には、全員大切な「家族」です。僕はこれからも、この「家族」を大切に一日一日精一杯平和に生きていきたいです。